

これまでにない新しいグループホームを目指して

横浜市保土ヶ谷区

ツクイ横浜保土ヶ谷グループホーム

株式会社ツクイ横浜第五エリア 川口里砂

1. 『これまでにないグループホーム』とは？

本年 10 月 1 日にグループホームを新規開設することが決定し、私たちは開設準備を進めて行く過程で施設のコンセプトや方向性をどうするのか考えていました。弊社はすでにグループホームをいくつか運営しておりますが、せっかく新しく立ち上げるのであれば『これまでにない新しいグループホーム』を作りたい。管理者の思い、また地域からの期待に応えるべく動き出したのは良いけれど・・・、一体『これまでにないグループホーム』ってどういうところだろう？その答え探しから私達の取組みは始まりました。グループホームとは『認知症になっても住み慣れた地域で安心して生活できる場所』、でも実際のところはどうか？認知症となり少しずつ症状が進行して行く中で、入居した時は身体的にはさほど問題なく、ホーム内でも何かと役割を見つけて過ごして行けます。ただ弊社のグループホームにおいても開設から年数が経過するにつれ重度化が進み医療依存度が高く、また看取り段階へ移行するお客様も増えて来ているのが現状です。もちろん重度化を防ぐ取り組みも必要ではある、けれど果たしてそれだけで『安心して生活できる』と言えるのか？そこで辿り着いたのが『医療との協力・連携体制の確立』でした。

2. 求められる体制作り

グループホーム開設においてはあらかじめ協力医療機関を選定しておく必要があり、これまでの多くは施設に近いからという理由で引受けてくれる往診医や歯科医等を選定していました。日頃の健康管理や急変時の判断だけであれば、それで問題ないのかもしれませんが、でも私たちが求めるのは『認知症』という病気になった方を医療と介護の専門的な知識と経験を持ったチームで支えられること、どんな状態になっても最期まで適切なケアを行い関わって行ける体制を作ることです。だとすれば選定する時点でこの考えに賛同・協力してくれる医療機関を見つけて体制を整えることで想像以上の協力・連携が図れるのではないかとということになりました。弊社には“エリアサービスコーディネーター”という『地域連携』に特化した職種がおり、地域の医療・介護の機関と強いパイプを持っています。まずはその職員を巻き込み、医療機関の選定を始めることにしました。以前から弊社とも関わりがあり認知症から寝たきり・精神疾患の方への往診対応でも経験値の高い歯科医師へ私たちの考えについてプレゼンを行ったところ非常に興味を持って頂いたので、往診医や訪問看護ステーションの選定に協力をお願いしました。訪問看護ステーションはすでにグループホームへの訪問の実績があり、看護師の在籍人数も圧倒的に多く看取り等にも積極的に取り組まれている事業所を紹介頂き、歯科医師同様に是非そういった取り組みに参加したいと賛同して下さいました。また往診医についても認知症や精神疾患への対応経験が多く、地域医療や介護への理解が深いクリニックの医師と繋がる事が出来ました。調剤薬局については弊社エリアサービスコーディネーターと関わっていた地域の薬剤師会より紹介を頂き、ここに弊社の理学療法士や言語聴覚士、管理栄養士も加わりチームを結成。定期的に定例会を開催し意

見交換や取り組みの検討を行っていくことになりました。第1回目の定例会では顔合わせとそれぞれの立場からグループホームへ求めることや提案を吸い上げ。弊社の理学療法士・言語聴覚士からはお客様ご本人や介護職員でも取り組みやすい活動量を保つアクティビティ、CBA（認知面評価レポート）を用いてご家族様へ状況の報告を行うシートの作成や摂食・嚥下評価を行い歯科医師とも連携して『食べる』ことへのアプローチについて提案、連携医療機関については開設後の連携方法の検討だけでなく、地域に求められるグループホームとはどんなところだろう、今関わっているグループホームで気付いたこと、実際の事例を上げながらどこまでの対応ができるか等、医療と介護の立場は関係なく様々な意見が飛び交う会となりました。そして何よりもクリニックで使用している情報共有ツール（バイタルリンク）を使用させて頂き、医師・看護師・歯科医師・薬剤師・施設職員がいつでも繋がりお客様の状況をリアルタイムで共有、指示を仰げる体制を構築できたこと、また調剤薬局に関しても医師の出した処方箋を画像にて送信、配薬できるアプリ（EPARK）を使用し、そのアプリをダウンロードすれば遠方に住んでいるご家族にも服薬の状況がわかる電子お薬手帳の活用もできるようになったのは大きな収穫でした。そして開設前の施設内覧会において地域の方や入居を検討されている方に向けて公開講座を開催、医師・看護師・歯科医師・薬剤師により地域医療や認知症対応、看取りに関して講義をして頂き、地域密着型サービスとしての役割を担っていくことを発信することが出来ました。

3. 体制を整えたことで生まれた副産物

今介護業界は人材不足が深刻化しています。弊社においても他人事ではなく、どうすれば魅力的な会社になるのか、人が集まる組織となるのか様々な取り組みを行っています。その中で離職者の退職理由として良く聞かれるのが『安心して働ける環境』が整っていないということです。グループホームで言えば医療従事者が常に常駐している訳ではないので、急な状態変化の時も介護職員の判断や初動が鍵となって来ます。そのことが大きな不安や負担となるケースは少なくなく、離職や他サービスへの異動へと繋がっていました。今回開設前から関係性を構築できたことや情報共有ツールを使用することで、医療機関との敷居が低くなり介護職員からも『安心して働ける』といった声が聞かれており、『どのような状態になっても最期までお客様と関われる』といったやりがいにも繋がって行くのではないかと考えます。また医師も歯科医も往診日に関わらず『近くに來たから寄ってみた』と施設に立ち寄られ、お客様の状態観察やケアについて介護職員にアドバイスを頂いたり大きな信頼関係の構築が完成されつつあります。

4. 成功事例や情報の発信拠点に

当グループホームは開設したばかりでまだまだこれから成長して行く施設と思います。今回は医療連携を強化して重度の状態になっても安心して過ごして頂ける取り組みについてお話させて頂きましたが、一度入居されても『自宅へ帰る』ことができるグループホームとなることもコンセプトの一つと考えており、このチームが本当にうまく動き出せばそれも不可能ではないと思います。またこれを基に医療と介護の両方の側面から成功事例として発信すること、それだけではなく年齢を重ねて介護が必要になっても安心して生活できる地域作りを行う拠点となって初めて『これまでにないグループホーム』と言えるのではないかと・・・私たちの挑戦は続いて行きます。